

南方軍政関係史料④

小野佐世男

編集復刻

# ジャワ從軍画譜

軍政監部宣伝部 監修／ジャワ新聞社 発行  
編集 小野耕世／木村一信

大戦末期、ジャカルタで一冊の画譜が刊行された。  
それは戦時下でのジャワ島の自然や人々の風俗・生活全般を  
魅力あふれる暖かい筆と文章で描いた奇跡的に残された、  
歴史と文化の記録だった。

すいせん  
(50 音順・敬称略)

足立 元  
A·D·ピロス

加藤 剛

倉沢愛子

後藤乾一

櫻本富雄

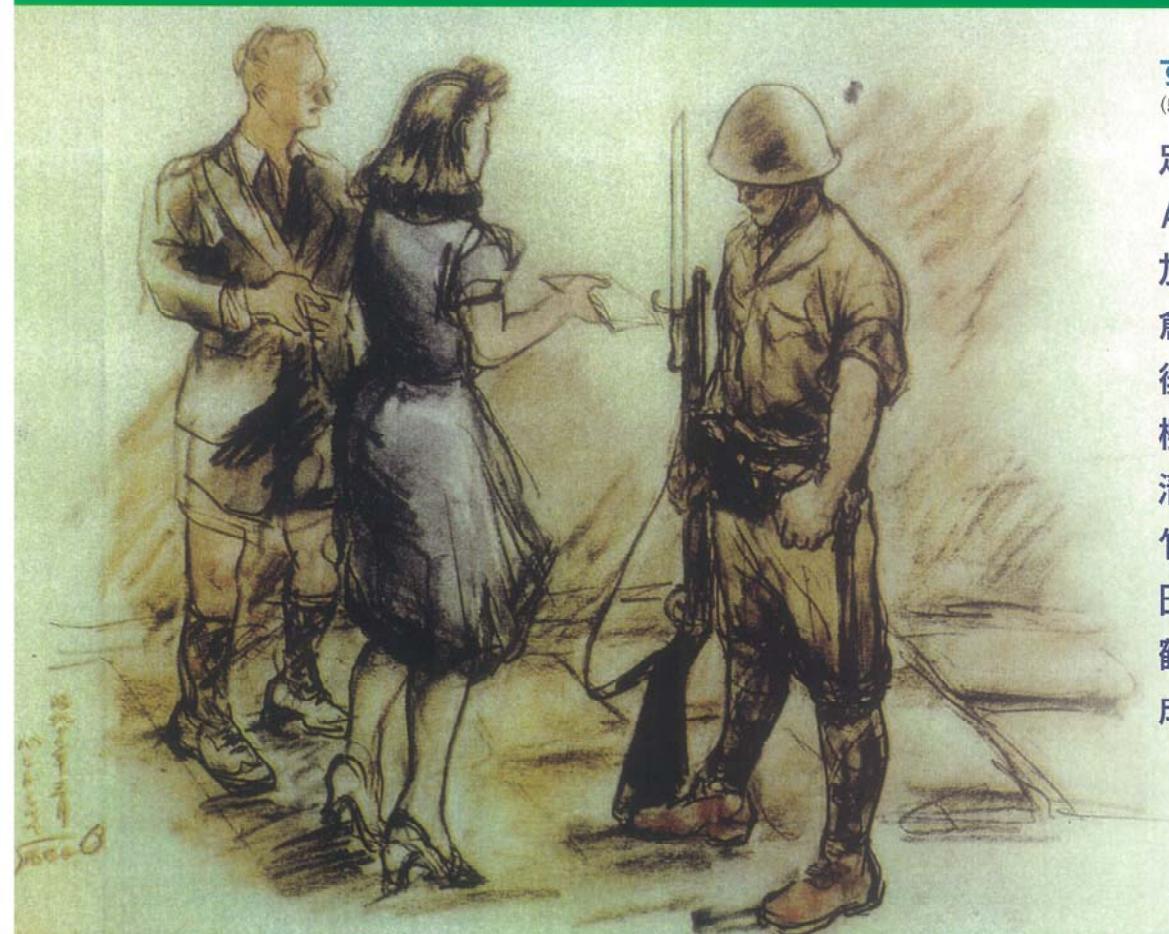
清水 熱

竹松良明

田名網敬一

鶴見俊輔

成田龍一



龍溪書舎

◆価格 25,000 円(+税)

# 刊行の辞

画家・小野佐世男（一九〇五—五四）は、一九二〇年代から五〇年代なかばに急逝するまで、油絵、漫画、イラストレーション、ポスターその他にモダンな女性を描き続け一世を風靡したが、その画業のなかでほとんど知られていないのは、陸軍報道班員として従軍され、一九四二年三月から日本の敗戦、帰国まで四年余りを過ごしたジャワ従軍時の作品である。

もちろんその画文は、日本軍の占領下に刊行された各種の新聞雑誌に発表され、一部は日本の新聞などにも転載されているが、軍宣伝班の要請以外に自主的に描かれた驚くほど多くのジャワ風俗のスケッチ画が残されている。そのほぼ全貌は、一九四五年七月、敗戦の一ヵ月前に、ようやくジャカルタのジャワ新聞社から刊行された「小野佐世男ジャワ従軍画譜」に見ることが出来るのだが、日本に持ち帰られたこの本の完全版は極めて少ない。ひとりの画家が、どのようなまなざしで戦争に対応し、戦地の人びととその暮らしを見ていたのか、当時のインドネシアの若い画家たちに刺激を与えたとも思われる本書は、いわゆる〈戦争画〉の枠を越えた広い視点からとらえる必要があるのではないか。その完全復刻版刊行の意味は大きい。

国立館大学21世紀アジア学部客員教授  
映画・漫画評論家

## 小野耕世

一九四五年七月、敗戦間近のジャワ・ジャカルタにおいて、一冊の画文集が出版された。漫画家・画家の小野佐世男による『ジャワ従軍画譜』（ジャワ新聞社・刊）である。小野は、そのデビュー当時、マンガ界に「麒麟児現る」と評され、「東京パック」の表紙絵を担当し、風刺画や女性風俗画などで溢れるばかりの才能を發揮していた。その小野は、「徵用」を受け、アジア・太平洋戦争開戦とともに陸軍・宣伝班のメンバーとしてジャワに送られ、三年余りにわたって宣伝・宣撫活動や文化運動に従事していた。

この、日本に持ち帰られた数のきわめて少なく、「幻の書」と言われる本書は、軍政下のジャワ・バリ島の街や村の様子、人々の暮らし、戦争・軍事、また、宗教、風俗、市場、お祭り、自然などを、余すところなく魅力ある筆と文章とで描き出している。本書は、その後、インドネシア画壇にも大きな影響を与えたという。

『ジャワ従軍画譜』は、一般の読書子の関心を引くことはもちろん、幅広い分野の研究に資する貴重な書物である。巻末に、専門家による研究エッセイ、解説を付す。

# ▲すいせんします▼

## 戦時期ジャワでの体験的生活史を綴る

倉沢愛子（慶應義塾大学名誉教授）

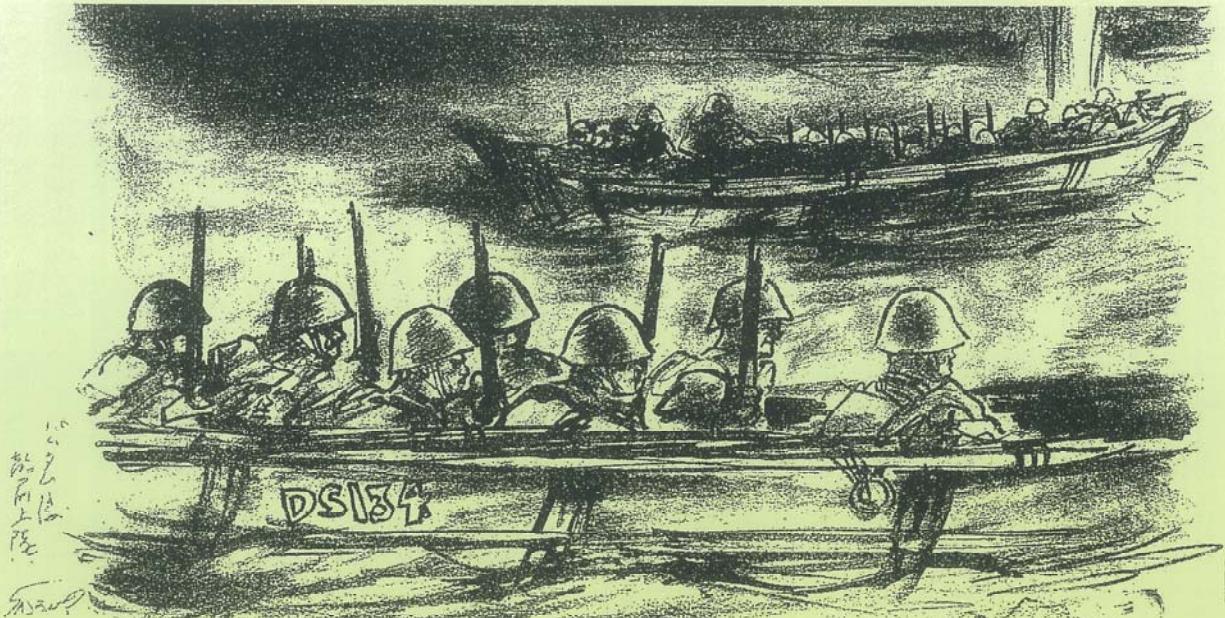
日本占領下のジャワで出版された『小野佐世男ジャワ従軍画譜』がついに復刻されると聞いて興奮を禁じえない。スケッチに和文とインドネシア語文の解説を付けたこの画集は、日本人のみならずインドネシアの住民にも見てもらうことを対象としていたと思われる。その内容は単なるアジテーションではなく、日本軍政の様々な局面を民俗色豊かな絵柄と平坦なことばで淡々と綴つたもので、後世の私達にさまざまな歴史的事象を伝えてくれる。

小野は宣伝班のあまたいる「文化人」の中でも、ジャワに滞在した期間が最も長い。南方への軍事侵攻の準備段階からすでに徵用され、ジャワに攻め入る一六軍の宣伝隊の要員として侵攻作戦に参加した。戦闘が重要な意味を持つ軍隊組織においてもあの時代、宣伝隊はけっして無用の長物ではなく、行く先々で現地の住民たちが、日本を歓迎するまでは行かなくとも、少なくとも植民地支配者側につかないよう繋ぎとめておくための様々な工作を行う事が要求されていた。「平定」後は、軍政監部の重要な一部局として設立された宣伝部に身をおき、宣撫工作と現地の画家・漫画家の養成に務めた。終戦後は捕虜生活を体験したのち一九四六年によく帰国している。つまり通算四年にわたるインドネシア生活を体験しており、現地社会への理解もそれだけ深かつたと考えられる。その小野がそれまでの見聞と体験をすべて絞り出して描きだしたのが終戦直前に出版されたこの作品である。

## 復刻・幻の『ジャワ従軍画譜』

櫻本富雄（文芸評論家）

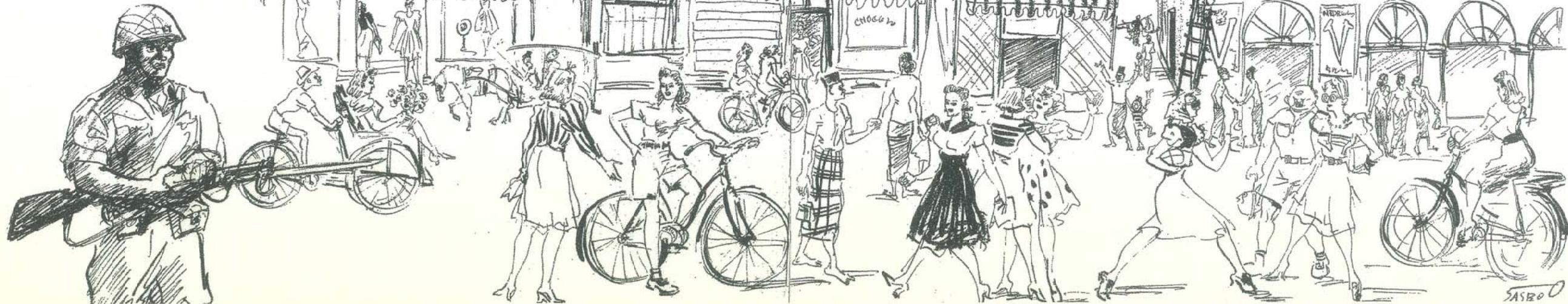
東京美術学校洋画科出身（現・東京芸大）の小野佐世男。世間からは、エロティックな女性を描く漫画家といわれている。『東京パック』（一九二八～四一年）の表紙に描いたエログロ調のモダンガールは女性の未来を予見するものと注目されたが、彼は洋画家志向であった。漫画は報知新聞社での世過ぎ手段にすぎなかつた。彼が漫画家としての評価がさだまるのは戦後で、アブレゲール時代（一九四五～五〇年）に発表されたグラマーラ女性像あたりからだ。その女性像は洋画と風俗画を混ぜ合わせたようなタッチで活写されている。洋画家を志しながら、漫画を描かなければならなかつた彼は、いわゆる漫画家集団とは一線を引いていた。新漫画派集団の『漫畫年鑑』（一九三三年）の「漫畫家名簿」に彼の名があるが、「年鑑」には寄稿していない（岡本一平、池部鈞、下川四天、柳瀬正夢等は寄稿している）。美術学校洋画科出身という矜持があつたのだろう。戦時下の漫画家たちの機関誌『漫畫』（一九四〇～四五）に発表されている彼の作品は少ないし、どれも政治風刺色の強い作品である。彼がストリップ小屋のルポを書いたり、カストリ雑誌にエロティックマンガを積極的に発表するのは敗戦後だ。苦汁の果てに彼は開き直って、世間の評価に便乗したのだろう。『ジャワ従軍画譜』は、洋画家志向の男が、陸軍報道班員として従軍する機会を、その夢を果たす好機と捉え努力し、結果的には挫折する過程を証する貴重な資料だが、長い間、幻の画譜であった。それが復刻される。正に朗報である。



最近、筑豊炭鉱の労働者だった山本作兵衛の記録画が世界記憶遺産に登録された。近代産業の基盤であった石炭エネルギーの供給現場を記録したその絵表現は戯画的である。そのため、過酷な労働状況を伝えているが、そこに動いたことを否定していない。歴史の一瞬にいたことへの筆者の誇りを感じさせる。一九九〇年代、パリのムーラン・ルージュで、入口に掲げられたたくさんの歴史的ポスターの中に、小野佐世男の画風そっくりの女性を描いた一枚を見つけて驚いたことがある。小野はヨーロッパに行つたことがないと聞くので、それは偶然の類似なのだろう。よく見ると、小野の描く女性と少しちがう。肉感が伝わってこない。小野の美人画は、肉感という一点で竹久夢二とも田中比左益子善六の中国行きあたりから始まつた。太平洋戦争期にはジャワ、ビルマ、フィリピン、ボルネオなどに漫画家が派遣され、たくさんの従軍漫画が生まれた。この民間に埋没している「漫画家による従軍画」という太平洋戦争期独特の絵画分野は、記憶遺産として見直す時がきたように思える。本企画はまさにそのスタートといえよう。



小野佐世男



### 軍政下のリベルタン - 小野佐世男の人柄を想う - 竹松良明

（大阪学院短期大学教授）

徴用されてジャワ派遣軍宣伝班に所属した作家・阿部知二は、戦後最初期の（ジャワもの）作品の一つ「あらまんだ」で、宣伝班員の心境を次のように描いている。「おもて向きでは感動的な言葉を吐いたり、勇敢な様子をみせたり、時にへつらうようなことをいつたりすればするほど、しだいに自分がうとましくなり、心の落着きはなくなり、神経衰弱のようなことにすらなり、（略）たがいの顔が、一自分もこめてバカのように見え合つてきて、快活などにはなれない」。南方に徴用された作家達は一様に心の膽を固め、勇躍して戦地に赴いたが、やがて軍政下での課せられた仕事の虚妄さに行き詰まり、作家としての自己の尊嚴を見失い、多くは南国を開拓的な気分の中にわが身を溶かし込むことで、戦争がもたらす壮大な不合理や虚偽、頬落や無意味からわずかに視線を逸らそうとする者が多かったと思われる。そうしたダルな雰囲気の中で、「人間はすこし放埒で、楽天的で快活で、人好きのする男」である「あらまんだ」の主人公、すなわち小野をモデルとしたこの男の存在がどれほど貴重であり、周囲の者の心をいかほどに「なぐさめてくれた」かは作品に詳しい。今回、小野の画風の一部を垣間見て、バタビアの街を闊歩する人達の足どりの軽やかさに一驚させられた。戦時下の風景とはとても思われない。まさに軍政下にあって自由闊達、清廉剛毅な（自由人）の面影を彷彿とさせるものがある。

### 小野佐世男の鋭く暖かい眼差し 田名網敬一

（アーティスト 京都造形芸術大学教授）

小野耕世さんからの突然の知らせで、私は銀座の美術館で開かれている「小野佐世男展」に出掛けた。溢れんばかりに展示された多様な女性像が発するまばゆい色香は、私を一瞬にして少年の時代に引き戻してくれた。

大都会を闊歩する女性たちの豊満な姿態は、外国映画でしかお目に掛かれないと、戦争がもたらす壮大な不合理や虚偽、頬落や無意味からわずかに視線を逸らそうとする者が多かったと思われる。その二つは私にとって、まさに光と影といふほどの艶やかさと華やかな魅力に満ちていた。少年時代の私の「神」は絵物語「少年王者」の山川惣治だが、その対極にある小野佐世男の絵も少年の心を惑わし、ときめかせたのだった。その二つは私にとって、まさに光と影と野の描く女性像の背後には決まって濃密な闇が潜んでいるようにおもえるのだ。小野の洒脱で奔放な線描も、油彩で塗りこんだ女たちの艶わいの図の裏側にも、艶やかな闇が身を隠しているのである。

小野が昭和二八年に出版した『猿々合戦』（要書房）の文章が興味ぶかい。「ここに現れる美人軍をセンネット・ガールといつて海水着一枚に濃艶な肉体をわずかに包みピチピチしたアメリカ美人軍には、にきび華やかなりし僕にはまるでこの世のものとは思えず、ただ夢心地、今なお女性の姿体美を書きつくすのに浮身をやつしている自分にはこのセンネット・ガールが大なる遠因をなしているのである。」暗闇から浮かびあがる美女軍、小野芸術のルーツのひとつが映画だったことは納得できる。銀幕で微笑む美女たちの豊麗な艶姿は、小野少年の心の深層にながく沈潜し後年の小野作品の重要なキーワードになったのだろう。

## すれ違った人の思い出

鶴見俊輔（哲学者・大衆文化研究家）

日本の漫画史で大正期は、エロ・グロ・ナンセンスということになり、私が見たものでいうと、下川四天の「男やもめのがんさん」が今も心に残っている。

小野佐世男は学生のころから「東京パック」の表紙などを描いていたそうだが、たしかに私の子供のころ、彼の漫画を見たことはある。それは下川四天のニヒリスティックな面影のあるものではなかった。

たまたま、一九四二年（昭和一八年）、私は海軍軍属となつて、ジャカルタ在勤海軍武官府に勤務し、陸海軍合同の報道関係者の会合で同席したり、ジャワ会館という大カフェでそれちがつたりしたことがあり、小野佐世男の面識を得た。その風貌はおだやかで、エロ・グロ・ナンセンスとはおよそかけ離れた漫画を描く人だった。ニヒリスティックな風格からかけ離れて、やさしくおだやかな人柄に見えた。体は大きく、体力があり、軍人となぐりあつても、ひけを取りそともなかつた。

そのころジャワは、オーストラリアを向こうにまわしているとはい、普通の暮らしの中により、小野さんの好んで描く、健全でエロティックな女性が自由に行き来するところだった。最後は敗戦を迎へ、小野さんも捕虜生活を送られたらしが、日本に引きあげてから描かれる漫画にあるよう健全なエロティシズムの作風を、戦前・戦中・戦後を貫いて保つた人として、私の記憶に残つている。

## 「南方」の視点から

近年、〈帝国〉という観点から、あらためて一九一〇世紀の歴史が書き換えられようとしている。「戦後」が一九四五に出発するという認識の再検討から始まり、植民地の表象をめぐる議論、あるいは帝国内－植民地間の人びとの移動など、多くの問題系によつて、〈帝国〉を批判的に検討し、あらたな世界史像を探ろうとする動きである。帝国主義と民族主義の単純な対抗に止まらない、複雑なありようには接する試みといつてもよい。

これは、帝国主義と植民地主義が、決して過去のものとなつていいという切実な認識に抱つてゐるが、大日本帝国もその例外ではない。日清戦争から日露戦争、アジア・太平洋戦争から朝鮮戦争、ベトナム戦争に至る動き、台湾と朝鮮半島、さらに樺太などを領有したことを、〈いま〉の状況を踏まえながら考察がなされている。

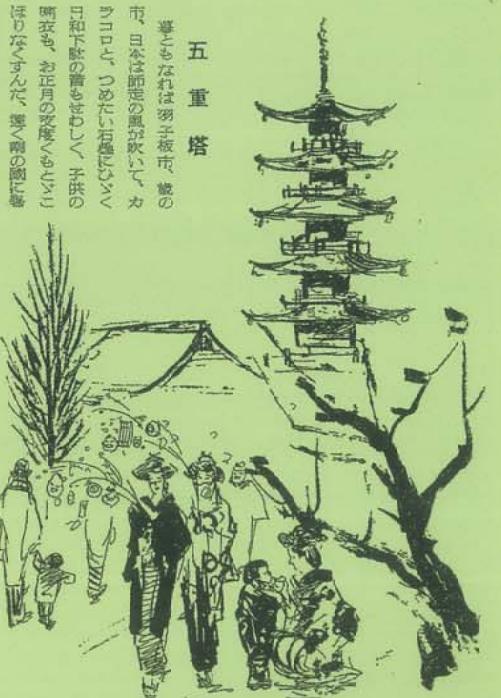
しかし、このとき、大日本帝国の検証は、東アジアに比重がかかつてゐる。いささか強い調子でいえば、「大東亜共栄圏」を考察しようとして、「南方」が一九四五に出発するという認識のなかなか東アジアの範囲から脱け出しえない。ここには、東アジア地域以外においては、史料の整理と発掘が、出遅れているという状況もあつた。こうしたなか、木村一信さんの手による「南方徵用作家叢書」は、その制約を解き放ち、私たちの目を「南方」に向けてくれた史料集としておおいに貴重であつた。

その木村さんが、あらたに、小野佐世男「ジャワ従軍画譜」を復刻するという。画文により、ひとりの画家がどのように「南方」を切り取り描き出したかは、「大東亜共栄圏」を考察するうえでまたとない対象を提供してくれるはずである。〈帝国〉の考察に欠かせない史料が、木村さんによつて、また提出された。

成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授）

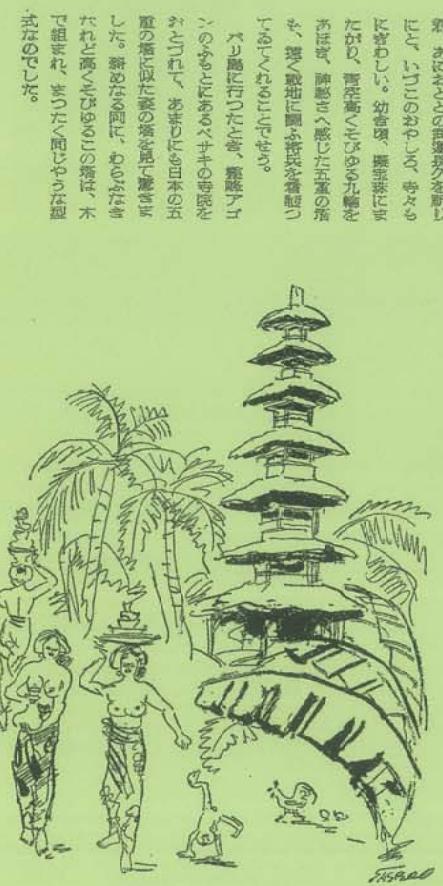


マランの喫茶店 Waroeng kopi di Malang.



Menara-bertingkat-lima.

Poera di Nippon, oenoemoja mempoenja menara-bertingkat-lima.  
Di selatan suja memerlukan menara semajam itoe di Bali. Seketika  
meilhat itoe saja teringat akan kenang-kenangan : semasa saja  
masih ketjil pernah mempoenja nistan nekat, ingin memandang  
menara itoe sampai kepoenjak.



# 本書の特徴

- ①「漫画界に麒麟児現る」と評され、一世を風靡した画家が徵用文化人として従軍しつつ、大戦下のジャワを見た。敗戦による帰国まで約4年間にわたり、彼の地の兵士たちの日常や戦闘などと共に、それ以上に人々の暮しぶりを風俗・お祭り・行事・市場・自然などのさまざまな角度から描いている。ジャワ戦定作戦にむかう輸送船団の描写、ジャワ島敵前上陸に始まる行軍の模様、バタビヤ(ジャカルタ)入城後の陸軍宣伝班の仕事、日本兵、オランダ人、インドネシア兵などの姿が見事なスケッチ画で記され、日本語・インドネシア語併記の文章が、画家の心情を伝えている。
- ②現在では失われたジャワの人たちの生活風景が多色刷りを多く含む絵により活写され、1940年代前半のインドネシア風俗の貴重な記録として歴史・文化的な価値を持つ。戦争が生んだ世界にも類のない奇跡的な画集。

編 集 小野耕世（国士館大学21世紀アジア学部客員教授・映画・漫画評論家）

木村一信（ブルー学院大学学長・立命館大学名誉教授）

解 説 木村一信

エッセイ 小野耕世

加藤 剛（京都大学名誉教授・総合地球環境学研究所客員教授）

足立 元（美術史家・女子美術大学非常勤講師・武蔵野美術大学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員P.D.）

A・D・ピロス（バンズ工科大学教授）

対 談 鶴見俊輔／小野耕世

すいせん 倉沢愛子（慶應義塾大学名誉教授）

後藤乾一（早稲田大学アジア・太平洋研究科教授）

櫻本富雄（文芸評論家）

清水 純（漫画・風刺画研究家）

竹松良明（大阪学院短期大学教授）

田名網敬一（アーティスト・京都造形芸術大学教授）

鶴見俊輔（哲学者・大衆文化研究家）

成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授）

（50音順・敬称略）



## 南方軍政関係史料 43

体裁：B4変形（横長）・上製・  
総約250頁・カラー刷

◆価格 25,000円(+税)

◆制作部数 300部

◆刊行 平成24年9月

◆ISBN: 978-4-8447-0304-4



龍溪書舎

〒179-0085 東京都練馬区早宮2-2-17 電話 03-5920-5222  
FAX 03-5920-5227 振替 00130-1-76123  
<http://www.ryuukei.co.jp> Mail: info@ryuukei.co.jp